

<資料>

ルタ・デ・ドンバスコ計画は、どうなっているのか？

Is the Ruta de Don Vasco Plan Now Functioning Well?

荒川 正也*

Masaya Arakawa

2010年に「メキシコ伝統料理」は、ユネスコ無形分遺産に登録された。その申請書式中で謳われていた、ミチョアカン州でのパイロットプログラムの対象であるプレペチャ（インディヘナ）の食文化を継続するための彼らの生活基盤の持続性をもたらす観光客誘致計画：ルタ・デ・ドンバスコ（ドンバスコの道）は、登録後4年を経過した現在どうなっているのかの一端を調査した際のフィールドノートをここに示すこととする。

キーワード：ルタ・デ・ドンバスコ、持続可能性、政権交代、ユネスコ無形文化遺産登録

I. 背景説明

2014年には、無形文化遺産登録された「メキシコ伝統料理」における伝統の継承とグローバル環境下で確固とした伝統を基盤にした新たな展開を可能にする状況をメキシコ全国に拡散するため、まずミチョアカン州において開始された中核的な催しである Encuentro Cocineras Tradicionales¹⁾に参加して、筆者は短期間のフィールドワークを実施した。州内のインディヘナの村落の優れた料理人48名が州都モレリアに集い、各々にブースが割り当てられ、そこで4から6種類の料理を来客に提供すると同時に、お互いが料理について学び合い、コンテストで技を競うものである。（詳細及び分析結果や考察すべき論点は論文『メキシコ伝統料理』の無形文化遺産登録とその後（流通科学大学論集 人間・社会・自然編第29巻1号）で検討している。）

ところで、無形文化遺産の伝承を確かにするための要件として、各々の無形文化遺産が属している締約国が実行せねばならないとされているのが、遺産の担い手の人々の生活基盤の持続可能条件を整備・実行していくことであった。そして「メキシコ伝統料理」に関しては、後に他の諸州でも実施するためのモデルとなるパイロットプログラムの対象であるミチョアカン州におけるこの文化遺産の担い手とされるのがプレペチャ族の人々で、彼らの生活基盤の持続可能性を構築するために、Ruta de Don Vasco²⁾が企画され、着実に進めていくことが登録の時点で謳われていたのである。³⁾

そこでこれが着実に実行されているのかを調べるのが、2015年におけるフィールドワークの

*流通科学大学人間社会学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町3-1

課題であった。だが事前に RDV の HP を調べてみると、かつてはしっかり構築されていたものが、立ち上げが極端に遅く、かつて掲載されていたはずの情報がかかなり削がれてしまっているように思われた。いずれにせよプレペチャの人々の生活基盤の持続可能性を高めることを実現するために観光振興を目的にした周遊ルートが現在どうなっているかをしっかり検討することが不可欠と考えられた。そのために昨年 8 月から 9 月にかけてメキシコにおいて調査を行った。その際のフィールドノートのうちで重要性に欠ける部分等を削除し、他方で記録再現性に重きを置き、可能な限りその際につけたノートの記載内容を変更せずに資料として提示しようとした。また、筆者の関心が食文化にあるため、一見すると主題との関係が希薄と感じられる事柄も記述されているが、筆者がその価値を認めたことによっている。

II. フィールドノート

8月26日(火)

(8月25日(月)関西国際空港より搭乗予定のユナイテッド航空機が台風のため欠航となったことによるメキシコシティへのかなりの延着について記した部分：削除)

(ホテルの自室にて) 正午ぐらいに起き出し、ECT を実質的に運営している当事者組織で、南の郊外大学都市に隣接するサンアンヘル地区(コロニアスタイルの街区)に本部のある Conservatorio de la Cultura Gastronomica⁴⁾を訪れ、あわよくば話を聞ければ一々なかなか見つからない。坂が多く石畳が続きいささか疲れたので、アルタビスタ通りに見つけた「泉」という日本料理店に入った。2、3階が店舗で、 nonsmoking の客は3階ということであった。

注文したのはてんぶらのアソートメント、「泉」サラダ、味噌汁、ごはん。それに緑茶である。おそらくこんな組み合わせでは、メキシコ人は食べない。照り焼きや寿司などが多いのではないか? ごはんは、日本のお米よりは粘性が少ないがかとってインディカ米のようなこともなく、ちょうど良い蒸かし具合であったのでまあ美味しく食べられた。味噌汁は、かなり大きめのお茶碗といった容器に入れられていた。そして、当然のこととしてスプーンがつく。てんぶらは、基本的に野菜のてんぶらで、少しべっとり気味のところはあったが、まあかろうじて合格点。てんぶらのたれはちょっと甘みが強い感があったが、これもまあまあ。サラダは、ブリーツレタス、わかめ、小さめに刻まれうすめの味付の鶏肉の照焼、キュウリの漬物で、ドレッシングはしょうゆとチレ及びオリーブオイルでできていた。二種類のサルサの小皿も置かれていた。味噌汁は、一番ましで、ほぼ日本の味噌汁というところ、ただスプーンで久しぶりに味噌汁を飲んだ。緑茶が最も奇妙で少しミントの香りのするお茶であった。日本料理もメキシコに根付き始めて20年近くになるのではないか。独自のスタイルが出てきているのではないか?

「泉」を出て、探索を再開した。ディエゴリベラ通りの彼の(=壁画で有名なディエゴ・リベラ)博物館のところを下り、いろいろ聞いてたどり着いたところが、ゲーティッドエリアへの入

り口の関門であった。どうやら目指す施設はその中に立地しているらしい。ガードマンに用件を言ったのだが、午後4時30分ぐらいであったはずなのに、職員はもう帰ったので明朝来るようにと体良く追い返された。なぜこの組織のオフィスがこのようなところに設けられねばならないのだろうか？本来は、秩序は必要にせよ多くの関係者が、提言やプランを自由にやり取りしてよりよきものを目指すべきものはずで、そうであればなぜこのような地区に立地しなければならないのだろうか？創設主体の中核になんらかの深謀遠慮があるのではないか？将来に起こりうるだろう最も悪い事態を想定しているのではという疑いを禁じ得ないのであるが――

8月27日（水）

〔メキシコシティからモレリアへのバス移動、モレリア初日：削除〕

8月28日（木）

〔午前の活動は削除〕

メキシコで長期のフィールドワークを行うために滞在していた日本からの留学生と、ホテル1階のレストランにて食事を共にしつつ、私の方から去年のECTの概要の説明をして、それを取り巻くいろいろなことに関連して、質問をするという形で話を進めた。回は重ねられているが、参加する村落及び料理人は近年においては一定期間固定されているようである。もし仮に実際に固定されているのであれば、本来の各々の伝統を守りつつグローバル時代の接触にも対応する料理人を養成していくならば、多くの村落から順繰りで参加してもらうことが不可欠だろうということになった。また、州を個別の単位として今後も展開していくことを意図して、ミチョアカンでパイロットプログラムを実施しているけれど、ミチョアカン州という行政空間を単位として正当化することの妥当性は薄いのではないか、プレペチャは、確かにミチョアカンのインディヘナの多数派であるが、それとは異なるグループに属する人々もおり、他州に居住するプレペチャもいる。プレペチャすなわちミチョアカンというわけではないのである。だとすると州を単位とした文化の一貫性への収斂が明示されていなくともそう方向付けられるとすれば、かなり問題だろうということについても合意した。確かにそうは言ってもなんらかのレベルでの画一性ないし統一性という方向性自身を全く否定してしまうことも困難だと思われるのだが――

8月29日（金）

〔午前の活動は削除〕

午後5時に始まる（ミチョアカン）州のCONACULTA⁵⁾などが主催するFestival de Arte y Ópera Contemporáneoのプログラム中のExperimental Voices(訳するとすれば「実験的な多声」となろう。)を鑑賞するためにホテルにほど近いTeatro José Rubén Romeroに出かけた。最初のエスコバルの演

奏はあまりにも前衛的すぎて反吐が出そうな面を否定できなかったのだが、面白い試みと言えばそうである。多様な電子装置を一人で操り、とりわけ胃カメラらしきものを操り微妙な時間差を視覚的に作り出していた。ただ鑑賞のためにやってきていた高齢の知識人らしき人々は、まさに嫌気がさしたのであろう、演奏終了を受けてすぐさま退散された。それに引き続く二人は、まさに自ら熟達した多様な音や声を操り絞り出す能力を駆使して、様々な情感のたゆたいを見事に表現していた。その中でも最後の Theresa Wong が醸し出す優しさと許しの感情に東洋的なものを感じて深い共感を持った。

8月30日（土）

今日は、RDVの実態がどのようになっているかを、パツクワロ湖を巡るコースの主要な目的地の一つである SFL 村に行って確認しに出かける日である。朝はどんより曇り、寒そうな予感、そして雨が降りそうな予感がした。とりあえず高い Lu で朝食を取らずにコンビニ OXX（オキソ：ナショナルチェーン）で、マンゴーネクターとサンドイッチを購入し、28日に留学生から頂戴した（プレペチャの）パンも食べるということにした。食後フロントへ行きハイヤーの手配をした。午前11時少し前に SFL 村へと向かうことになった。まさにこれはメキシコの価値判断に基づいた行動であろうが、日曜日で一緒に過ごす予定であったというアメリカ合衆国のサンディエゴ在住のおば（運転手はワイフと表現していたが互いの会話を聞くことでそう判断できた。）が助手席に乗り込んで一緒に全行程を過ごすということになった。コースは、モレリアから向かうとすればおきまりの高原地帯を貫通する Ruta de Alta を通り、SFL 村に到着した。

ここでなすべき第一の仕事は、言うまでもなく RDV の HP に掲載のあったこの村に立地しているはずの伝統料理を提供するレストラン 2 つが今どうなっているか本当に営業しているのか？（営業を）始めてその後の顛末はどうなったのかを確認することである。まずすぐにわかったことは、Plaza に面して営業しているとされたレストランは最早営業していないということが明白になった。（HP 上で）責任者とされた女性は、もはや高齢であり、最初から客などごく稀にしか来た試しがないということであった。近くにその後受け継いで一時やっていた人の家を訪ねたが、留守であった。近くでそのレストランの状況を知る女性にたまたま出会ったのであったが、彼女の言をまとめるとすれば、当初は、電話で事前に要望を聞いて準備してその翌日に訪ねてもらうことになっていた。その後には予約要望もほぼ途絶えた。最初は、州の方から民族衣装の提供や実施者にとって美味しい条件の提示を受けていたのだが、その後音沙汰なしとなり、現在は何もやってはいないということであった。

おそらくはこういうことが、空疎な中身を呈している RDV の現況を示しているのだろう。その後（広場にて）露天の tortillería（トルティーヤ売り）の女性から昼食としてケサディーヤを購入して食べた。ECT についてその女性に話を伺ったところ。おおよそ次のようなことを述べた。

代表者を2人（正確には3人）も送り込んでいるこの村も、おそらく州政府からの一本釣りような形で関わっているものであり、私自身はその人たちとなんら関係ない。最初から彼らが、私たちの将来に対してなんらかの貢献をしてくれるなどということは考えられないことなのだという趣旨のことを述べた。私の推測であるが、村民の多くは、積極的に反対するわけではないが、そもそも期待できないことなどわかっているのが結果として無関与を貫いているだけであるということを示したのだと思われた。つづいて二つ目のレストランにも赴いたのだがここも表面的には、オープンされているように見えなかった。ただこれだけでは実際に営業が行われていないということの証明にはなり得ないことは確かである。これは、先を急がされた運転手の策略にまんまとはまって私自身が確認することをしなかった。確認することこそが大事なとは言うまでもない。

最後にこれで4回目の訪問になる Pátzcuaro（ミチョアカン州の観光の中心）に向かった。――観光客向けの各種手工芸品の販売所になっている La Casa de los Once Patios を観光客の一人という意識を持ちながら見て回った。明らかに5、6年前に訪れた際よりも観光客が少なくなっている。多様な分野の手工芸家が店舗を出しているが、4つの店舗スペースが閉じられており、そのうちのひとつが明らかに開店準備中であった。もちろん観光客向けの店舗は、このみというわけではなく町中に多くあることは確かだが、ここに入居する条件は、それなりに厳しいものと考えている。

要するに残念なことではあるが、ミチョアカン州は犯罪が多くなっているということが広まり、国内外双方からの観光客数が減少しているということは、幾人もの人々から直接聞いていたことである。そこで、本来なら浮揚させるために有効に機能することが期待されるはずの RDV が、有名無実になってしまっているのでは、この州の先行きはどのようなのだろう。本来（5年が経過した2015年であれば、かなりな果実が実を結んでいるはずなのだが――結局は、当初潤沢にいた予算も吸い取る人々がいつものように吸い取り自分の懐に入れて、結局立ち上げに必要なものやことに十分に回るといことが最初からなかったということなのであろうか。

8月31日（日）

〔午前の行動は、削除〕

昼近くになってミチョアカン大学図書館の向かいの寿司のローカルチェーン Mikono Sushi⁶⁾ に入り、メニューを見て Ibelica 巻き（生ハムが外に巻かれ、内には本来ならばたこ何か野菜が巻き込まれるのだが、たこがなくマグロが巻かれた）とレモネードを注文した。日本の寿司の巻き具合とは随分違い、全部が均質にふわっとしており、醤油も些か奇妙なものであった。帰り際に、「泉」においてと同様に Misoshiru が Misoshiro と表現されていたので、誤りを指摘して出てきた。

9月1日(火)

RDV のホームページを眺めてみると、ホテルも一軒だけだがあると記されていた。それが、Hostal Ec.であった。再度行って色々話を聞いてみたい気にさせられた。そこで思い切っていくことに決めて、ホテルのフロントから電話をしてもらい、宿泊可能であることが分かったので、2泊してみることに決した。そこで ATM にて、それ相応の金を引き出してきて、部屋に戻り宿泊の準備をして、午前 11 時 30 分にタクシーで再度同じ村にと向かった。村に入ってから見つけ出すのにだいぶ苦労することになった。広場の前の一本道を東に 2 ブロックほどということはグーグルアースでわかってはいたのであるが、通りに面する部分は全く他の村内の住宅となんら変わりなかった。鉄の頑丈な扉を開けると、細い通路があり、あまり営業意思のないような文房具店を想像させる品々が無造作に置かれていた。そこを通ると広くなり目の前に小さなパティオが現れた。これを囲むように通路と階段があり、奥側の通路の先には、左側の部屋に祭壇がしつらえてあり正面に(いわばメキシコのアイコンと言える)ヴィルヘン・グアダルーペの絵が飾られ祭壇上には、亡くなられた先祖の写真と花が飾り付けてあった。その右横が奥のパティオにと続く通路となっており、その壁面に ECT への長年にわたる貢献と RDV 計画への当初からのホテル設置への貢献への感謝の意を評する賞状が飾られていた。どうやら部屋は、一階の一室ということになった。⁷⁾ 部屋には二つのシングルベッドと鏡、衣裳戸棚があり、隣の部屋が洗面台、便器、及びシャワーとなっていた。とにかく夕食が、午後 5 時ぐらいから開始ということで、それまで時間があるということで、村の中を歩くことにした。すでに何回も来ているので特に何かするということはなく、イグレスシアとその周辺をぶらりとしてすぐに戻り、部屋で寝ていた。5 時ぐらいに起き出して、コメドールに行き料理を作り始めるのを待った。あまり食欲がないということでトルティーヤの一種のゴルディタを作るためにメタテ等で Masa(トウモロコシを潰し練ったもの)を整えはじめて、それと並行して、竈にまきをくべて火を入れ全体に行き渡るようにさせることを始めた。着いた火を満遍なく行き渡らせ火力を強める手段として、実が取られて乾燥されたトウモロコシを入れた。続いて、比較的大きめのまきをすべての方向に均等に入れたが、もちろん大きめなので上ではみ出してしまっている。その後少しくべただけで取り出してしまった。そして比較的小さいのを炊き込み口から放り込んだ。丸く作られた抛釜口の上に円形の盆を置きその上にトマトとチリセラノを乗せ蒸し焼きにし、その後かぼちゃの花も軽く乗せ、その後メタテとモルカヘテで捏ねて丸められ出来上がったゴルディタも盆に載せて蒸し焼きにする。焼き目が十分についたら、ゴルディタとしては出来上がりであるが、それをナイフで裂いて開き、その中にケソ(=チーズ)、カラバサ(=かぼちゃ)の花及びチリセラノを入れたものを食する。昨年 10 月の ECT においても実感したのであるが、こねる作業はかなりな重労働である。これは間違いないことで、延々と長きにわたって営まれてきたことがすごいことのように思われる。

食後早めに部屋に引き上げた。特にやることがない。しかも極めて静寂な中に置かれる。しか

し闇に包まれた中で、それを打ち破るように時々商人が車で街路を周り拡声器（とんでもなく大きな音の場合もある）で商品のアピールをする車に積んでいる場合もあるようだし、Plaza において販売しているので来てくださいといっている。おそらく日常の生活時間構成の上で夜の方が多くの購入者が期待できるということが前提にあると思われる。いずれにせよ、比較的早く床についた。

9月2日（水）

生活は全くゆったりと進行する。9時過ぎぐらいに村内の別の場所にある本宅から、お母さんがやってきた。そしてトルティーヤ作りに取り掛かった。朝は、娘さんは何か仕事があり、お母さんの Sra.IDC だけであった。経営者でお父さんの Sr.EHT は遅れてやってきた。

朝食ができるまでに、男性とおしゃべりをした。私は、私の名前をいつも使っているメモ帳に書いてお教えた。その見返りとして、お名前を教えていただいたのである。続いて日本地図を書き東京、名古屋、大阪の位置を示して、瀬戸内海、琵琶湖を示し、最後に宝塚市の位置を示した。また日本の文字についてもお教えた。漢字は中国起源であり、ひらがなとカタカナがあり、カタカナは西洋起源のものに用いることなどであった。

メキシコの国旗と日本の国旗の話もした。そのシンボリックな意味について話をした。経営者も妻も歌好きなので、何か日本の歌を聴かせて欲しいということであったので、迷ったが「さくらさくら」を歌った。こういうシチュエーションでの典型的行動で、我ながら呆れたのではあったが――

朝食は、ケサディーヤとコンソメスープ、コーヒーそれにトルティーヤとフゴ・デ・ナランハであった。ケサディーヤには、かぼちゃの花と当然ながらケソが入っていた。食事の後、前日お願いしていた村内の案内をお父さんにさせていただくことになった。

まずは、村の南に東西に走るアウトピスタ沿いにある6軒余の陶器の土産売りの店舗に赴いたのだが、それよりも元セクンダリアつまりは日本でいう中学と高校を合わせた学校の教師だったということで、多くの若者に気軽に声をかけている。そして村内のほとんどすべての人と知り合いのようである。そして、名前を聞き損ねてしまったがその店の店主が、この村の意向を受けていたのか背景は不明であるが、おそらくは村の守護聖人（この点も聞き損ねている、頭が回っていない。）であろう、San Júdas の像をアメリカ合衆国で購入し持ち帰り、その功績ということで、その人の店に飾られている（NiñoDios も横に飾られている）のであるが、毎月28日が守護聖人の日であり、10月28日には、盛大な祭りが行われる。この際には、経営者の男性が、Padrino を務められて、教会まで像を先頭にして行進が行われるということである。

これら6軒の店を比較すると、同じような柄の同じような品揃えに一見見えるのであるが、相互にはっきりと特徴を出し、製造過程でもかなり工夫を日々繰り返して、競争をかなり強く意識

して商売をしているとの説明を受けた。ある店の売り上げがかなり上がったとすれば、それを模倣して差を埋める努力をするといったことは、日常茶飯だということである。しかしながら、原材料費や手間を考えると極めて利の薄い商売の環境であるようで、何れにせよ生活をギリギリ支えているというのが現状であると思われる。一応確かにバツクワロ湖の周囲の集落は、Vasco de Quiroga (=Don Vasco) の貢献もあってかそれぞれの集落は各々に特化した手工芸品を有しており、隣町の Q においての木工品作りに携わるため、同町に勤めに出る村人もおり、移民は少なめであるとは言っていたのだが、決して生活の質の向上に資するなどということはないようである。

一連の店舗を見てから、村の西端を形成すると思われる道を北に向かい、広い教会の敷地内に入って教会の建物まで歩いた。キリスト教が入るまでは、ここは埋葬の場であったということであった。要するに、ラテンアメリカに多く見いだせる元来の宗教枠組みにキリスト教が接木されるということであろう。地元を受け入れられるように説教にも分かりやすさのための工夫がなされ、記憶装置としての効果のための分かりやすい絵文字表現が教会正面には見られた。

9月3日(木)

朝、予想したより遅く朝食を作るため来られていた娘さんに本来お母さんに聞く心算であった重要な質問をぶつけてみた。ほとんど客がこないこのホステルの物理的な存続ができていく条件が、彼女のお母さんが、長年休むことなく ECT のブースに立ってこられ、おまけにマエストラの称号も得られて、(プレペチャの食文化の) 持続可能であることを身をもって示してこられたことの功績がまず第一にあるように思われる。第二に、ミチョアカン州を単位とするパイロットプログラムが、当事者・担い手であるネーティブ、プレペチャの生活改善につながっていくことが、計画進行を経て実際に確認可能であることを、ユネスコに明示することが持続性の証のキーポイントのひとつであり、そのためのプランこそが、RDV であったはずである。(省略) メキシコ国内のツーリストが事前によくチェックすることで知られる México Desconocido の HP でも言及や情報提供は皆無であった。本来国が力を入れたパイロットプランの柱が、登録から5年を迎える現在こんな状態ということについての、国民からの怒りが全く形になっていないのも、ある種の諦め感のなせる技なのだろうか？つまりは、当初の思い入れとは裏腹に地元民への貢献は消え去り、そのための予算は、立ち上げ維持改善といった本来のところに注入されず、誰かの財布の中に消えていったのだろう。このホステルが少なくとも物理的には継続できているのはお母さんの貢献への見返りとしての助成金が細々ながらも出ているからではないかというシナリオであった。

これを娘さんに率直にぶつけてみるとその通りであるという答えであった。村民の約半分ぐらいには、なんらかの見返りらしきものがあるが、それが生活の改善につながるなどということはなく、結局微々たる金額に過ぎず、政府が土台私たちのことを真面目に考えるなどということはありません。全く悲しい実態であるということでした。8) 全く悲しい実態であるということでした。

齒にもものを着せずストレートに言えば、要は儲けのための資産であるインディヘナの独自文化を自分たちの懐を肥やすためだけに使っているということである。そして、ECT という機会の来場者が、伝統的な料理に触れることによって自らもその子孫たる自覚に目覚めて料理を受け継いでいくということに触発することなどまず期待できず、単にその時だけおもしろい催しだから、来てその時を楽しんですぐ忘れるだけなのだろうという見解に二人の考えは落ち着いた。

(午前 11 時 30 分にタクシーが迎えに来て) モレリアへの帰途に着いた。ホテルに帰着後、少し休みシャワーを浴びてベッドに横になってから、無目的ながら街に出た。午後の熱い日差しを避けつつ歩いて Palacio Clavijero に入った。この建造物全体が Centro Cultural Clavijero と呼ばれる総合芸術センターであった。全部で 4 つの主題の異なる美術作品展示が、1、2 階合わせて 7 つある展示室のうちの 5 つを用いて行われていた。その他に図書館や演奏会会場などを備えているが、4 の展示会をくまなくゆっくりみた。一つは、ミチョアカン及びメキシコ全土の山岳を中心とした風景画の展示であり、はっきり言ってあまり興味深くはなかった。二つ目は、ミチョアカン出身の有名な木版画家の作品展示であった。特に Migrante (移民) という連作はかなり興味深いものがあった。移民の生活シーンに投影される心情をうまく表現していたのように思われる。三つ目は、メキシコ各地の版画作家の靈魂に関する主題を扱った作品が集められていた。四つ目が、La Producción Artista Horizonte Contemporánea en Michoacán という初日から間があまりない展示であった。いろいろな傾向や主題のものが見出されたが、メキシコの過去のインディヘナの世界のミスティシズムと現代社会の亀裂を扱ったものが結構多かったように思う。描く手法や主題は全く様々なのであるが、メキシコが抱える深い亀裂の大きさを感じさせられた。なお日本の美術の翻案や模倣と見られるものも数点見出された。その後このセンターのショップに入りいろいろ物色したが、文化人類学と歴史学の書籍コーナーに興味深いものを見出したので購入した。El Colegio de Michoacán から、社会人類学の博士号を得られ、現在 Universidad de Ciencias y Artes de Chiapas の Centro de Estudios Superiores de México y Centroamérica の教授にして調査者である Jesús Solíz Cruz が 2012 年に出版した Ser Ciudadano Ser Indio – Luchas Políticas y Formación del Estado en Nurío y Tirindaro, Michoacán – である。かつてミチョアカン州において生じたプレペチャ農民の対政府の自立運動の二つの村落での比較研究である。

9 月 4 日 (金)

[モレリアからメキシコシティへの移動日：削除]

9 月 5 日 (土)

[メキシコシティからロサンゼルスへの移動：削除]

ホテルにチェックインできたのが、午後 2 時過ぎであったために、あまり何もできないと思わ

れた。結局ダウンタウンに出て少し歩いて最終的には、巨大なそして迷路を思わせる古本屋 The Last Bookstore に行くことに決めた。いつも通り、ホテルの真横にあるロサンゼルススのメトログリーンラインの駅から乗車し、途中の駅でブルーラインに乗り換えダウンタウンの終点7番街駅にと出向いた。私が、(ダウンタウンを)歩いて強く印象付けられる変化は、かつて週末には、怖いほどの人の流れで繁栄を極め、メキシコ系の人々のための繁華街という様相を呈していたマーケットストリートの完全なる凋落である。土曜の午後だというのになんと閑散としていたのだろうか？人々はどこへ行ったのか。この問いへの回答は、おそらくは、メトロでのスペイン語放送の中止、3年前訪れたテーマパーク型ショッピングセンター・プラザメヒコの週末におけるかなりな喧騒状態。メトロブルーライン沿い(東側)にダウンタウンの南縁にまで続く、70年代後半以降のメキシコ移民第1世代が集住する広大な郊外住宅地。これらの事象を統合的に説明するだろう大きな環境変化が生じてきていると考えることが必要なのであろう。

マーケットストリート以東のインナーシティは、かつては貧しいメキシコ系の人々の住居と店舗から構成される地域であった。しかしながら、メキシコ系の経済環境の改善による郊外居住化が進むとともにアングロにとっては心地よいジェントリファイされた区域としてマーケットストリート周辺が立ち現れてきている。少なくとも昼間の雰囲気は、劇的に変わったのである。(そしてこの変化は記憶に間違いがなければ、南に数ブロックぐらいにまで広がっていると言えるのではないか。)

ただおそらく深夜には大変危険な地域であることに変わりはないのかもしれないのだが――

9月6日(日)

翌日の早朝には、帰国の途につくということで実質的に今日が最終日である。今日は、ホテルのビュッフェにおいて朝食をとった。コーヒーとオレンジジュース、そして、シャンピニオンとチーズの入ったオムレツを作ってもらった。これらにパン二つを加えたものがこの日の朝食である。3回の日本料理以外はサルサをつけたものばかりを食してきた身には、新鮮なものであった。部屋に戻って横になってから、午前11時20分頃にホテルを出て、メトログリーンラインのロングビーチブールヴァード駅まででかけ、リンウッド市(ミチョアカン州出身者の集住地)に立地するテーマパーク型ショッピングセンターPlaza Méxicoへと出かけた。メキシコの架空の町のセントロ(=中心街)を再現したものである。敷地の広さは、おおよそ東西400メートル、南北600メートルぐらいであった。東側は、駐車場である。駐車場に面する形で food 4 less、ドラッグストアチェーン、そして、なぜか不自然な印象を与えるビュッフェ形式の中国料理レストランがある。なぜこんなにも大きな中国料理レストランがこの敷地内に必要なのであろうか？そして前回訪問時には、こんなレストランはなかった。以前に訪問した際には小規模な衣料品店舗やフードコート内の幾つかの店舗を東アジアからの移民が経営し、実際に店頭に立っている店であった。

彼ら彼女らの存在は、故郷メキシコに出会うことを期待した顧客にどう映っていたのだろうか？今回同じスペースを訪れた際には、(たまたまなのかもしれないが) 彼らを見かけなかったことは確かである。そして、もう一点はつきりさせねばならない点は、南カリフォルニアのフードスーパーマーケットチェーンである food 4 less の店舗が縮小され中国料理のビュッフェになっているという点である。(これは一体なんの兆候なのか？)

日曜日ということもあり、かなりの人出があり、そんな中広場の催し物会場では、ミチョアカン州の隣のハリスコ州出身者の団体による催しがおこなわれており、表彰式がなされていた。

フードコートと小規模店舗がかなりの数入居している2階建ての建物に、かつて東アジアからの移民の経営する店舗がかなりの数存在していたことは確かである。フードコートの2階部分には、廉価な日本食チェーンが入居していた。ここのメニューはかなり面白く、日本人にはちょっと考えられない組み合わせのコンボが多く見られた。いよいよ「日本」食は、多様化していく道を歩んでいるなどというのが実感である。

Ⅲ. まとめ

ECT による金の還流があるので RDV はどうでもいいというわけではなかろう？いずれにせよ政権を奪取した PRI は、PAN が申請時にユネスコに示したプランよりもかなり前倒しでことを進めている。現時点では、確たる根拠を示せてはいないが、立ち上げ時点で「のずさんさ」がスムーズな展開をそもそも不可能にしていたのに加え、PRI は、この仕組み自身に観光客誘致の面でもブレベチャの民にとっても不都合な面が多いと判断したのではないか？そしてもちろん PAN の力を削ぐといった側面が当然あることだろう。いずれにせよ RDV は、少なくとも一旦は破綻したと判断してよかろう。

写真資料



写真 1. Hostal Ec.1 階のピロティ部分から2階の部屋を望む



写真 2. Hostal Ec. 台所兼食堂



写真3. Hostal Ec. 夕食の Gordita (太っちょ)

写真4. Vasco de Quiroga がプレペチャの人々
のために設立した病院

写真5. 村の教会

写真6. 背後の微高地から村全体及び
パツクワロ湖を望む

《註》

- 1) 日本語訳すると「伝統的調理人の出会い」となる。以下略号 ECT を用いることとする。
- 2) プレペチャの人々が居住する州北西部の高原地帯に点在する村落と観光拠点となっている主要都市を結ぶ二つのルートが設定されていた。村落には、伝統食のレストラン及び台所で調理を見せる宿泊施設が、設けられていた。ところで Don Vasco とは、16 世紀にパツクワロ近郊地域を統括していたカトリック神父であり、パツクワロ湖畔に点在する村落個々にそれぞれ独自の特産品の生産を奨励することで、パツクワロ地区の活性化に大きく貢献した人物である。故にこのルートは、Don Vasco の功績を辿るという意味合いが持たされていた。尚以下では略号 RDV を用いることとする。
- 3) 2010 年 11 月ナイロビにて開催されたにユネスコ無形文化遺産締約国会議での審議のために提出されたメキシコ政府の手になる申請書簡 (Nomination File no.00400 For Inscription on the Representative List of the Intangible Cultural Heritage in 201, UNESCO) 中で明記されている。しかし、2012 年 11 月の大統領選挙で、

- PRI（制度的革命党）が、大統領の座を奪還した。先代の大統領は、PAN（国民行動党）所属で、ミチョアカン州パツクワロ市出身であったことがその後の展開に影響した可能性はあるのではなかろうか？
- 4) この件に関しては事前にアポイントを取るなどの準備はせず思いつきで行動にうつしたものであった。
 - 5) メキシコ政府の文化政策の総元締め機関であり、州単位でローカルオフィスがある。ECT に関しては、最も背後にいて舵を取っている組織の一つと見なしている。
 - 6) Mikono Sushi とはギリシャのミコノス（島）のすしを意味する。ロゴマークも朱色・黒・白で形成された古代ギリシャ風デザインの魚があしらわれたものであった。モレリア市内に7店舗を展開していることがパンフレットからわかった。
 - 7) このホステルは、1階2部屋2階3部屋で構成されており、調理過程を見せるための大きめの台所兼食堂が別棟に設けられている。
 - 8) 推測の域を出ないのではあるが、おそらく Encuentro Cocineras Tradicionales での売り上げをどんな原則に則っているかは不明ながら、参加した調理人あるいは参加した村に還元する仕組みは機能しているはずだと考えている。